

算数科を通じた, 校内研修活性化のための アドバイス事例研究

志水 廣

数学教育講座

A study of advice's to refresh the education for teacher in the school on math class

Hiroshi SHIMIZU

Department of Mathematics, Aichi University of Education, Kariya, 448-8542 Japan

キーワード：現職教育, カウンセリングマインド, 授業診断, 授業シミュレーション

1. 本研究の目的

筆者はこれまで多くの学校の研究にたずさわってきた。主に算数科の研究が多い。その中で研究授業や研究発表において成功した事例がある。その事例からコンサルティングにもいくつかの手法と基本方針があることに気づいた。

従って、本研究の目的は、学校の校内研修会を活性化（言い換えると現職教育）するためのコンサルティングの手法を明確にすることである。そのために具体的な事例を通して考察していく。

事例は全て算数科ではあるが、広く他の教科でも通じることがあると考える。

この手法を公開することによって、学校内での教務主任や研究主任などのリーダー、指導主事などの方にお役に立てれば幸いである。

ここで紹介する事例は、4つある。

- (1) 授業診断について
- (2) 研究授業の事前指導の持ち方
- (3) 授業がかみあわない教師への示唆
- (4) 授業シミュレーション

以下、4つの事例について述べていこう。

2. 教師への授業診断はカウンセリングマインドで

- (1) 授業診断とは何か

まずは、授業診断の定義を文献1から紹介しよう。

「授業診断とは

- ① 教師の力量向上のために行うものである。
- ② 一時間の前半と後半、それぞれ10分~15分を見ていただいた後、すぐにコメントをもらう。

- ③ 授業者が自分の授業の傾向を知ると同時によさに気づきながら、指導・助言を今後の授業に生かすための研修の場である。」

要するに、教師の授業を見て診断することである。ただし、筆者の第一の特徴は一日に多くの授業を参観して診断するのである。研究指定校になれば全学級の担任が公開してもらう。小規模の学校であれば6人全員、中規模であれば18人ぐらいの授業を診断する。だから、実際の授業診断では、一時間に一人の場合のこともあるし、三人を見る場合もある。

研究授業を参観・診断した後、指導する場面は個人に対してすることもあれば、全員の校内研修の協議会の場面であることもある。時間があれば、一人ひとりに診断結果を話してあげるのが望ましい。

筆者の第二の特徴は、何回も一人の教師の授業を見ることである。一時間の前半を見てとなりの教室へ行き、また戻って元の教室を見るのである。だから、教師はびっくりする。筆者が教室からでて教師はほっとしたと思ったらまた帰ってくるからである。

何回も見に行くのは、できる限り授業者及び子どもたちの長所を見つけたいからである。教師に対しても子どもに対しても短所是正よりも長所伸展の方が効果があるからである。

つまり、授業を診断する人は、この人の長所はどこかという視点で見つめることである。また、短所をどうしても指摘する場合は、具体的な改善案を持って望みである。

では授業診断の事例を説明しよう。

- (2) 今のままでいい

それは、今から数年前の9月の中旬のことだった。豊田市立高嶺小学校の校長室で筆者は、ベテラン教

諭のO先生と向き合っていた。O先生は、第3学年の算数の授業をして筆者が授業診断の結果を話す時だった。与えられた時間はわずか20分間である。

話したことの要点は、次のようであった。

「あなたの授業は、説明型授業ですが、とても説明が上手なので、子どもがよく理解できているし、できるようにも鍛えていらっしゃる。このままで頑張ってください。」

結論は、「今のままでいいよ」であった。

なんだそんなことかと、この論文を読まれた人は言うかもしれない。筆者の一言が、一人の教師の今後の方向を決めるとなれば、それなりの覚悟がいるのである。

その結果どうなったか。半年後に問題解決型授業に変身したのである。人間とは分からないものである。筆者の考えていることの逆に行動し、結果として見事に子ども主体の授業に変わったのである。

先程長所伸展法ということを述べた。

そのことをO先生の言葉を借りるならば、「志水先生の授業診断は、いつでも授業者の長所に光を当て、意欲の部分に働きかけながら伸ばしていくというのが特徴的であった。」となる。誤解してならないのは、あたりさわりのない言葉で現状維持を勧めているのではない。

なぜ、O先生に「このままでよい」と言ったのか。

まずは、

- ① 教師の精神エネルギーの素晴らしさ、
- ② 授業への工夫が見られること、
- ③ 子どもの表現力（どの子どもも図に考えを表していたこと）が育っていること、
- ④ 教師と子どもが一体感を持っていること

の4点があったから説明的な授業であったがOK（オーケー）を出したのである。

説明的な授業は、その当時の新しい学力観から言えば正反対の授業なのである。

そんな観念論では現場は指導できない。

(1)から(4)がそろっているのではないか。子どもは満足しているぞ。筆者がO先生の力量を判断した決め手は、教卓にあった板書の手帳である。確かな数学の流れがきめ細かに書かれてあった。

説明的な教師が目前にいたとしよう。多くの指導者は問題解決型がよいと方向転換を迫るだろう。

それが間違いなのである。教師への指導でもカウンセリングマインドが必要なのである。まず、ありのままの教師の姿を認めることである。

O先生によれば、「私自身の内的不安を実に正確に受け止め、これまでのやり方について肯定していただいたのである。不思議なものだ。受け止めてもらえたという実感は素直な反省を可能にした。…診断後迷うことなく問題解決型のやり方へと動き始めたのだ。意欲

が動いたのだ。」となる。

それから、改善点を示唆すればよい。

(3) 改善点の決め手

では、なぜO先生は方向転換したのか。実はもう一つアドバイスしたのである。それは、「子どもの考えやつぶやきを板書の上で示すといいですね」という一言であった。

この授業の中で、子どもは算数的にいいことを話しているのである。それを予想した板書にのせるだけで授業がさらによくなると思ったからである。

このアドバイスを受けたO先生は、「先生（筆者）からのメッセージが、いつも私の頭の中をぐるぐる回り始めるようになった。実践しながら考え、考えながら実践する毎日が続く。」となった。

(4) 半年後の姿

半年後、たまたまO先生の授業診断することになった。子どもの発言を生かした授業になっていた。40代の教師でも変容することを見せつけられた。また、本当に筆者自身も嬉しかった。

そのあたりのことを本人から（文献1）語ってもらおう。

「第一回授業診断から6ヶ月、2回目の授業では、問題解決学習スタイルをとることができた。子供の考えを板書に載せることも少しはできた。終わったときの満足感が、次へのエネルギーとなったといったことを、今も嬉しく思い出す。

たった一つのアドバイスであっても、そこに込められた情報を読み取っていくとき、そこには教師としての力量向上のための秘策がいくらでもうずもれている…」

O教諭の授業診断例から言えることは、まずはその教諭の授業スタイルを認め、そこから出発する方向性を込めてアドバイスするということである。

授業診断は上に立つ者の仕事である。多くの教師は授業がうまくなりたいと思っている。それにふさわしい診断をしてほしい。

3. 研究授業の事前指導の持ち方

(1) 事前指導が大切

今年（2001年）の2月の半ばに豊田市立大林小学校のY教諭の授業相談を受けた。一週間後には研究授業が控えている。

大学に赴任してから多くの授業を参観して指導してきた。赴任後、二、三年して授業だけを参観して、事後指導でコメントばかり言うのがいやになってきた。

「あの時、こうやればよかった」と言うのがいやになったのである。だから、できるだけ事前指導したいと思っている。その場合も対面して話しながら相談にのることが望ましい。

もちろん、県外の学校の指導では一週間前に訪問す

るわけにはいかないが。

(2) 研究授業の目的

研究の授業の目的は、授業者やその学級の子どもたちが成功感を持つことである。

だから、終わった後に「ああすれば良かった」というのは結果論である。だから、できるだけ事前にお手伝いできればありがたいと思うのである。

筆者の顧問学校に豊田市立高嶺小学校と岡崎市立羽根小学校がある。どちらの学校でも事前にできるだけ指導してきた。だから、授業の力即ち授業力がついてきたのである。

研究主任、教務主任、学年主任、また指導主事などは、職員の力を向上させる立場にある。だから、ある教諭が研究授業をしようと決意した場合は、指導者も成功させるのだという決意を持つべきである。

(3) なぜ研究授業をいやがるのか

それは、教師が研究授業に対して成功感を持っていないからである。自信がないからである。普段の授業はまあまあいく。でも、研究授業となると、緊張してしまって教師も子どもも普段の力がでないのである。何回か成功感を味わったならば、「どうぞ見に来て下さい」と言える。

したがって、ただ研究授業をやらせましたというのは、全く無責任である。教務主任・研究主任・学年主任としては失格である。

教師に自信がないから、研究授業後の協議会ではあたりさわりのない意見ですませてしまう。自己防御の心が働く。協議会が「忙しい時期にご苦労様でした」となぐさめあいになってしまう。

板書が一つの改善目標なら、板書の向上策を示してその授業者によりそって練習させるぐらいでないといけない。そうして、成功すれば、授業者もまた授業者を支えた人も嬉しいものである。

だから、研究授業の事前に時間・空間的に余裕のある時は、相談にのっている。

(4) 普段の授業はどんなの？

冒頭のY教諭は学年の教諭3人と共に大学の研究室に訪れた。初対面である。自己紹介の後、4人で話した。さて、Y教諭が、第3学年の文章題「かくれた数はいくつ(2)」についての指導案について説明してくれた。

聞けばY教諭は新卒だという。授業経験は10ヶ月である。指導案は少し荒いと感じたがこんなものであろう。

初めに質問したのは、「普段の授業はどんなの？」である。どんな授業をしているのか説明してほしいと話した。

すると、考えさせてはいるけれど、子どもが分からないと思うと、説明が多くなり、スピードがあがるという。他の先生方も「彼女は早口で説明し始める。ま

た他の言葉で説明する。すると、子どもがますます分からなくなる」という。

それならば、「早口で説明しないのでできることが目標だね」と筆者は言った。また「あがらないで授業ができることだね」とも言った。

教材研究についても話したが、それよりは授業者にできそうな目標を与えることが必要なのである。だいたいにおいて、教員は自分が新任だった頃失敗していたことなんか忘れて、最高の授業像を描いてさせようとする。ここに過ちがある。

筆者だって、新任で研究授業をした時、いい教材でいい反応だったのであるが、子どもの発見を生かし切れなかった苦い思い出がある。そんなことを話すと、学年の先生方は思わず笑ってくれた。

だからこそ、「普段の授業像」の把握が重要なのである。普段の授業で、説明型の授業をしている人がいきなり問題解決型の授業をしようというところに無理がある。だから、「説明的な授業でもいいんだよ」と話した。要するに、教師と子どもが分かり合える喜びが見える授業ならば合格である。

どうも先生方と話すと、理想の授業像・学習指導案が先にある、それに無理やり当てはめようとする傾向が強い。それでは、新卒の教諭はたまらない。一歩だけでも前進すればいいのである。

もし、説明型で授業をしようとするれば、子どもにとって分かりやすい説明を工夫させることである。算数の授業が全て問題解決型でできるなんて考えること自体が狭い見である。教師から説明したならば、子どもが本当に分かったかどうかの評価の手だてが。ここまで授業者にフォローすることである。

(5) 注文したこと

ただし、子どもに考えさせる場面は必要なので、「一か所だけでも考えさせて下さい」と注文をつけて話し合った。

教材研究と指導技術としては、子どもの発表場面のやりとりについて練習させた。子ども役と教師役の両方をY教諭にさせて、その後、筆者や学年の先生方と意見を交流した。注文として、

- ① 授業者に対して、授業の細案（TとCの問答を事細かに予想したもの）を作ること、
- ② 学年の先生方と共にリハーサル（シミュレーション授業のこと）をやってみてほしい。つまり、放課後に教室で学年の4人だけで授業のリハーサルをやってほしいとお願いした。

(6) 実際の授業では

S校長先生が授業反省会後、校長室で「Y先生がこんなに素晴らしい授業をしたのを見るのは初めてだ。私は嬉しい」と話された。この校長先生の言葉が示すように授業は、Y先生なりに階段を一步上がった感じである。筆者も同感である。

非常に落ちついて授業が始まり、子どもたちが自力解決した。その後の友だちの発表もしっかり聞くことができた。反省会の時に、「子どもたちが飽きずに45分間集中していたことにびっくりした」という声も聞かれた。授業の成功も無理をせずに一歩アップさせることをねらうことだ。

ここで筆者が考える授業力の定義を紹介する。

授業力 = { (教材把握力) × (子ども把握力) × (指導技術力) } × (精神エネルギー)

この公式にそってアドバイスすればよいのである。新任教諭の場合、始めの3つ目までの要素は低い。しかし、授業としては教師と子どもが一体感がある。その理由は、教師の若さの精神エネルギーで持っているからである。

そこで、この精神エネルギーを前提として、少しだけ向上させようと努力させればよいのである。

人間及び社会は「生成発展の理」で動いている。つまり、少しずつではあるが全てのもは生まれて発展するのである。この原理に寄り添って生きると伸びるのである。教師も現状の姿から一歩でもアップしようとして努力させれば伸びる。授業の成功も無理をせずに一歩アップさせることをねらえばよいのである。

大林小学校は、その一歩を認め合うような職員集団であった。

4. かみかわない教師への対処の仕方

(1) 学級経営で問題がある場合

今から3年前、愛知県内のある地区の算数・数学研究発表会のお手伝いをした。N小学校に3回ほど入り授業作りの指導をした。5月に12人全員の授業参観をした。子どもの質もいい。殆どの教師も子どもとのやりとりがいい。ただし、算数の内容をもう少し踏み込みたい。全体の指導でそのことを筆者の授業ビデオを通して説明した。

さて、その中で1人子どもとかみ合わない教師がいた。その中の一人A先生の指導について話そう。

A先生は、30代なかほどの女性である。授業は分数のわり算の授業を淡々とこなしていた。子どもが分かるが分かるまいが淡々と話しているのである。どうも学級経営もうまく行っていないらしい。

(2)じっくり聞く

授業後、校長先生に話した。A先生だけは、全体の協議会后1時間ぐらい個別指導してカウンセリングしたいと申しでた。校長先生はすぐに意味を察してくれてOKをしてくれた。

こんな先生にあなたはどうか話されるだろうか。その時とった手はまず聞くことであった。冒頭で説明したカウンセリングマインドである。

筆者(S)とA先生とのやりとりを紹介する。

S: 今日の授業をやってみてどうでしたか。

A: どうもうまくいきませんでした。この分数のわり算のやり方が子どもは分からなかったようです。子どもは発表もしませんでした。…。

A先生は、5分ほど授業がうまくいかなかったことについてひたすら話してくれた。

A先生自身が授業の失敗の事実はよく分かっていると思った。さて、その後どう切り返したか。どうも授業に対して自信をなくしているようだ判断した。だから、逆のことを話した。

S: なるほど、そういうこともあったけれど、こんないいところがあったよ。例えば、ワークシートを作ったよね。この図は工夫されていますね。こんなふうに、あえて欠点を無視して長所を指摘する手法をとったのだ。

A先生はおそらくびっくりしたと思う。特別残されて校長室で個別に話したのだから何か注意を受けると思ったにちがいない。どうも自信をなくしているようなので長所伸展法で攻めた。

(3) 長所はどこ?

次に今の悩みを質問した。

S: どうも学級の子どものうまいってないようですね。どんなところが困っているのか話してくれませんか。

A: 私語が多いんです。だから、注意するんですけど、その時限りなんです。注意の方が多くなるんです。

20分ほど、今の学級について困ったことを話してくれた。これもじっと聞き役にまわった。A先生の話していることも事実だろう。さて、そこで、一言聞いてみた。

S: なるほど、今の学級の子どものために困っているんだ。今話してくれたことは、子どもたちの短所ばかりだけれど、子どもたちの長所は何か?

と、長所について質問してみた。

すると、A先生は、ぐっと詰まって即答できなかった。その後、15分間あったけれどA先生は子どもの長所を話すことができなかった。

そこで、筆者は、

「あれだけ先生がまずいと思っている授業でも子どもたちはなんとか聞こうとしていたよ。子どもは先生から学びたいんだよ。だから、子どもたちの長所をもう一度考えてみると、授業が変わってくるよ」と話して指導を終えた。もちろん、算数の教材の話もしたが、それよりかは学級経営のことが中心だった。

なぜこのようなアドバイスをしたのか。それは、先に示した授業力の公式から言える。

A先生と話していて、まずは精神エネルギーが落ちていると思ったのだ。精神エネルギーとは、第一に「熱意、気力、パワー」、第二に「肯定、受容」である。

A先生は子どもを受容できないから子ども把握力が

うまく機能しないのだと判断したのだ。

だいたい45分間ぐらい個別に指導した。

あと、校長先生に、「あの先生はこれから大丈夫だと思いますよ。ただし、よく見てあげてくださいね」とお願いした。

(4) 手紙作戦

やはり、1時間近くも個別対応すると気にかかるものである。立ち直ってくれるだろうか。そんな思いがあった。そこでA先生に励ましの手紙を書いた。

その後の返事がきた。

『拝啓 先日はお忙しい中、貴重な時間を割いてご指導いただき誠にありがとうございました。また、おはがきもいただき先生の温かいお心配りに感謝しております。』

先生にご指導いただいた指導法や子供との接し方など大変勉強になりました。この年になりますと、(研究授業で)できてもできなくてもほめる研究協議会になり、適切な助言をして下さる方はほとんどおりません。独学で一人前の教師になる努力をしなければならないのですが、理想が崩れていくにしたがって、私自身のパワーも消滅してしまい、歯車がかみ合わなくなってしまいます。

「教師が生き生きしなければ子供も生き生きしてこない」「自分が楽しくなければ子供も楽しくないんだ」ということ頭においてしっかりやらなければと思っております。

また、いろいろな機会を捕らえて子供との接点を増やすよう心がけていきたいと思えます。…

(子供たちに)悪いところを指摘すればするほど、子供たちは遠ざかってしまいます。いいところをほめて伸ばしていかなければいけないことが、先生にご指導いただいてわかりました。

あんな恥ずかしい授業で悪いところをいっぱい指摘できるような授業でも、先生はほとんど口にされませんでした。ちょっとしたことをほめて下さったり、助言していただいたことで頑張らなければというやる気が出てきました。

私は、今まで悪いところを改善していかなければ良くなれないと思い、悪いところばかりを見ておりましたので、先生に「子供たちのいいところはどこ?」と聞かれて、あまり答えることができませんでした。

家に帰ってじっくり考えてみますと、結構ありました。子どもたちとうまく行っている部分もあるので頑張ってみます』

このようにある年齢になると、回りからなかなかアドバイスしてもらえないということになる。特に、A先生はそれまで中学校の音楽の専科であった。小学校に転勤してきて2年目である。本当は、算数のことはあまり知らないはずだけれど、教えてほしいというには年齢がすぎている。そういう心の憂鬱さが分かった

からこそ、精神エネルギーの充填から始めた。子どもの長所を改めて意識させることで、今の子どもたちへの見方を変更させることができる。すると、ありがたいという気持ちがわいてくる。長所への観点変更こそが教師を変えるのである。

(5) 研究発表会では

また、こちらから返事をかいた。その際、近藤洋一「生命力の処方箋」(角川書店)の一部2ページをコピーしてあげた。教師として人間として「生きる力」のわく本である。

それから、1ヶ月後、校長先生に電話したらA先生は元気で頑張っていますとのことであった。

11月に地区の算数の研究大会があった。その学校の授業はとても生き生きとしていた。もちろん、A先生も子供と息がピッタリあっていた。また、手紙をかいた。

次は、その後の返信文である。

「授業が終わって片付けをしているときに、『Aさん』という声があったので廊下を見ると、附属小学校の教育実習のときの指導教官がいらっしゃいました。14年ぶりの再会に懐かしいやら恥ずかしいやら複雑な気持ちでした。先生(筆者)同様、教職経験のわりには…と思われただろうと思うのですが、気を使ってくださって、『子どもが一番よく話を聞いていてよかったよ』言われました。とても嬉しかったです。低空飛行ぎみだった気持ちが、ここでまた一気に加速して、子ども達のために精一杯頑張らなければという気持ちになりました」

振り返ってみると、校長先生はじめその他の先生もA先生の努力を陰ながらサポートしたのだろう。きっと、A先生が素直になったからだろう。

これでこの教師は自立していける。

この事例からわかるように、まずは授業者の気持ちを受け止めて、それから長所伸展法の方向を示すことである。後から校長先生にうかがったのだが、彼女の場合、得意な音楽の授業で子どもたちを一つにまとめていくことができたようだ。これも、彼女の長所を伸ばした例と言える。

4. 教師の実践的指導力が身につくシミュレーション授業

(1) 理想と現実の違い

教職経験も数年になるとどんな授業がよい授業かという授業像ができてくる。それにそって学習指導案を作れるようになる。

ところが、現実の研究授業はというと、その通りにはいかない。つまり、頭の中で考えることと実際のその教師の動きとは異なるのである。

例えば、指導上の留意点で、「ここで、ほめる」と示されているが、実際にはほめないですぎていってしま

う。極端には、ここで支援するといいながら、結局は教え込む。それなら始めから「教える」と書けばいいのに、教師のプライドがそれを許さない。子どもから引き出すことが苦手なら、教えることだって悪くはない。指導案に嘘を書くことがよくないのだ。

では、頭の中のプランと実際の動きを一致させるにはどうすればよいか。それには、シミュレーション授業が一番である。

(2) シミュレーション授業のすすめ

授業力アップのためにはシミュレーション授業がよい。授業シミュレーションとは、平たく言えば授業のリハーサルのことである。

演劇で言えば、シナリオがあってその中にせりふとト書きがある。演劇でも何回も稽古を積み重ねる。

にもかかわらず、研究授業は教師が一人でやるものだから事前に実際にリハーサルすることが少ない。

筆者が附属小学校にいたとき、先輩の教官から研究会の前までには放課後誰もいない教室で一人で発問や板書など一人で練習しなさいと教えられた。これだけでもかなり授業力は付くものである。

さらにいいのがシミュレーション授業である。シミュレーション授業は、職員が集合して授業者役と子ども役に分かれて実際の授業を進行してみるのである。

すると、かなりのことが見えてくる。

例えば、授業者のくせ、予想される子どもの反応、板書など…きめ細かくチェックできる。

大の大人が気恥ずかしくて、そんな授業のシミュレーションなんてやられてられないというのが普通であるが、それをこらえてやっていくと、授業のきめ細かさと授業のきびしさが見えてくるのである。

一つの授業45分間をシミュレーションすると60分～90分間かかる。だから、研修嫌いの職員集団でまずこれはできない。しかし、一度やってみると、これほど教師の授業力がアップするものはない。だからやみつきになる。

広島県世羅郡甲山小学校でこのシミュレーションを教えたなら校内研究会の前には必ずシミュレーションをしてみる。そして、実際の授業での変化と比べてみるのである。この学校に筆者がかかわってかれこれ6年になるが確かに職員集団が変化した。学校が変わる・子どもが変わったのである。明らかに授業の質が向上したのである。

(3) シミュレーション授業のよさ

はじめて授業シミュレーションをやったのが、8年前、豊田市立高嶺小学校の夏休みの授業研修である。授業者はK教諭である。文献(1)の中で、彼がシミュレーション授業についてこう述べている。よさについて3点を紹介する。

① 自分では予想できなかった子ども達の反応に気

づくことができる。

② 教師の指導方法の弱点に気づくことができる。

③ 授業を進める見通しが持つことができる。

(4) シミュレーション授業の実際の進め方

① 授業には予め学習指導案をたてておいて、実際の授業で使うワークシート、教具など準備しておく。

② 実際の教室で行う。

③ 教師集団は基本的に子ども役とする。教師の人数が多い場合は、子ども役以外に全く外部から見る観察者が2人ぐらい取れるといい。

校長も教頭も一緒になってやるとよい。

④ 一人司会進行役が必要。筆者は主に進行役をつとめる。筆者の特徴は、授業を途中でストップして皆で考えるアドバイス役をすることである。

⑤ 子ども役の教師達は次の3つに分かれる。即ち、よくできる子ども、普通の子供も、手間のかかる子どもである。このように役割を決めるとその子どもの立場で発言を考えようとする。手間のかかる子どもは、つまりいたり、とんちんかんな反応をして教師をてこずらせてよい。

⑥ シミュレーション授業を記録するビデオ係が一人必要である。

というのは、授業者はシミュレーションの最中は情報量が多く頭の中がパニックになっていて、後で振り返ってみても思い出せないから、記録が必要なのである。

記録ビデオを撮影する人は、授業を見てはいけない。カメラのファインダーを覗き込みできるだけ授業者や子どもや板書をアップでとって見ることだ。カメラを固定したままで撮影者がいない記録は授業の再現ができない。

⑦ 人数に余裕があれば、ノートへの記録をとる人とタイムを測定する人があればよい。

⑧ シミュレーションの後、授業者は家でビデオを見て、改善点を整理しておく。一週間後の本番に備える。

岡崎市立羽根小学校でも何回もシミュレーション授業を実施した。確かに効果があった。A教諭は、2時間のシミュレーションビデオを一週間間に3回も見て吟味したという。すごい努力だ。40代の女性教師がこれだけ努力するのである。だから、授業はエネルギー一杯の授業で成功したのである。

もちろん、高嶺小学校のK教諭も授業が成功した。同僚によれば、あれから明らかに授業が変化したという。ありがたい報告である。

そこで、K教諭からみたシミュレーション授業のポイントをあげてみよう。3つある。

① 授業者は教師役になりきろう。

② 子供役は、子供役になりきって参加しよう。

③ 観察者する教師は、客観的に見て話し合いに参加しよう。

①, ②について言えば、自分なりの役に徹するということである。それによって、子供の気持ちが分かってくるのである。このテレをどう取り除くかがポイントである。

③について言えば、教師役と子供役はどうしても当面の自分のことで精一杯である。すると、観察役がいる。この人が全体を見て別の視点で切り込んでいくのである。

だから、観察役の人は、絶えず自分ならどうするかを見て他の人が気付かないことを示唆できるようにしておかなくてはならない。

最後に、K教諭のシミュレーション授業、その後の感想を紹介しよう。

「シミュレーション授業のおかげで自信をもって研究授業に取り組むことができた。この経験により、私は子供の考えをしっかりと予想して授業に臨むように

なった」

筆者なりにシミュレーション授業のよさを付け加えてみると、教師集団が一体化するということである。みんなで教材研究していることになるから当日の研究授業に参加する心構えや態度が違ってくる。つまり、シミュレーションでやったことが実際にそうなるのか、予想を持って授業を見ることができるのである。

5. 最 後 に

教師の実践的指導力の向上が言われてきている。そのために、校内研修がかかせない。筆者のアドバイス経験から具体的な提案をさせていただいた。4つの視点のうちどれからでもいいから始めてほしい。

引 用 文 献

- (1) 志水廣・豊田市立高嶺小学校「算数大好き」明治図書 1994.
4 pp132~137, pp126~131

(平成13年9月10日受理)